ポストコロナの可能性としての〈女子たち〉

更新される〈父〉たち 三浦しをん『あの家に暮らす四人の女』

池上貴子

はじめに――現代は〈父なき時代〉なのか

ＩＴ産業の隆盛は今に始まったことではないが、スマートフォンやタブレットで誰もが気軽に情報を受信・発信できるようになった現在、個人の欲望にピンポイントで訴求するシステムを持つ者が経済を独占する動きが加速している。ＧＡＦＡなどのＩＴ帝国による恣意的な情報操作の例をみるまでもなく、地方の中小企業においてさえ、ＩＣＴをいかに自社のシステムに組み込み最適化するかが関心事の中心だ。そして、〈私〉の欲望が詰まった手のひらサイズのスマートフォンが、高速での多数接続が可能な第五世代移動通信システム（５Ｇ）に切り替わろうとするこの時期に、奇しくも新型コロナウィルスがパンデミックを引き起こしている。

〈私〉は更に個として切り離されていく。マスクをかけて接触を避けてさえ、身近な者にこそ感染していくそのウィルスの動態は、私達が妄信していた「人間的」な制度を揺るがすシステムそのものだ。この猛威を振るうシステムに対抗する中で、私たちがおそらく世界規模でのパラダイム・シフトを迎えつつあるのは誰もが感じるところだろう。それは間違いなくＩＣＴと結びついており、従来の制度的な関係を断ちながら、一方で思いもよらぬ個々のつながりを再生産していく。

たとえば、ＩＣＴの発達はクラウド上での個人管理を基とするため、その妨げとなる押印の廃止をする一方で、ネット決済などペーパーレスでのデータ通信を推進する。印鑑は基本的には「姓」で作られてきたことからも、これまで公的な個人の証明は、「家族」が担保していた。しかしながら、個人の欲望の洗い出しを徹底的にスムースにする現代のシステムにおいて、この〈家族〉という従来の制度的な単位はあまり重要ではなくなってきているようだ。なぜなら、〈家族〉単位で〈私〉の欲望は管理できないからだ。昨今、選択的夫婦別姓の議論が再燃しているが、父権中心に取り決められてきた我が国の家族制度が、〈個〉を中心に動

くシステムの中で限界を迎えてきているとも取れる事象だ。

しかしながら、現代は〈父なき時代〉なのか。「父」は権力から失墜したのではない。家族制度的な〈権力〉を脱し、ただ、〈私〉のために、よりフラットな場所に移動したのではないか。もともと生物的な関係性の中に位置していた父という存在が、家＝制度という枠組みに抑圧されていたとすれば、女のみならず父もまた、作り上げられた家長という制度的立場から解放されていくものであろう。

家父長制度が虚妄でありながらも、その制度を強化すべく言説を弄していることは、すでにG・ドゥルーズとF・ガタリがその共著『アンチ・オイディプス』（一九七二）で明らかにするところである。彼らの批判の対象である精神分析学の権威だったフロイトは、人間の欲望という無意識の領域を、父―母―子の「オイディプス三角形」（エディプス・コンプレックス）に当てはめ、統一性・連続性のもとにその精神状態を分析していた。ドゥルーズとガタリは、この構造ありきの分析法という恣意性、何よりフロイトが構築した、秩序立ち、連続的な〈人間〉、そして〈世界〉のあり方を徹底的に攻撃したのである。

私たちが問題にしているのは、精神分析が身をまかせている途方もないオイディプス化の操作である。（中略）分裂症化すること、オイディプスの首枷を吹きとばし、いたるところで欲望的生産の力を再び見いだすために、無意識の領野も歴史的社会的領野も分裂症化すること。分析機械と欲望と生産の間の絆を、〈現実的なもの〉にじかに接して結び直すことが、問題ではないのか。

「現実的」には個々の人間の欲望はカオティックで分裂的であるという。その欲望を父―母―子の連続した物語である「オイディプス的構造」に嵌め込んだものが、「家父長的資本主義的な」当時の社会であるならば、現在、起こりつつあるパラダイム・シフトにより、その虚妄の構造が無効化されつつあるのは興味深い。

家父長制の父権が根強い日本においてさえ、選択的夫婦別姓のみならず、離婚率と生涯未婚率の増加、別居婚、同性婚への制度要求など、制度そのものの根拠を問う事例が跡を絶たないのは、すなわち家父長制それ自体が揺らいでいるためである。

そんな揺らぎのアイコン（象徴）であるかのように作品の中で〈女子たち〉は登場する。権力を無効にし、絶望の中の日常を生き、制度を軽々と更新する存在として。

一　〈女子たち〉という部族